

カウンセリングにおける個別担当制・複数担当制へのセラピストのイメージ

Therapist's Image of Individual and Multiple Assignment System in Counseling

キーワード：カウンセリング，セラピスト，クライアント，二者関係

Keywords: Counseling, Therapist, Client, Two-party relationship

青山 有希

吉田 諭江¹⁾

Aoyama Yuki

Yoshida Satoe

¹⁾ 東小金井小児神経・脳神経内科クリニック

Abstract

The purpose of this study was to find out what kind of images and views therapists have about the structure of counseling in the individual-assignment system and the multiple-assignment system, in which multiple therapists support the same client while sharing information through medical records and reports. For this purpose, an interview survey was conducted with therapists. As a result, the following points were revealed.

- Therapists had a positive image of the individual-assignment system.
- Therapists had a negative image of the structure of the multiple-assignment system.
- In limited situations, therapists thought that the multiple-assignment system would benefit clients.

It can be inferred that therapists had a bias to emphasize the relationship between counselor and client, and therefore had a negative image of the multiple-charge system.

要旨

本研究では、個別担当制とカルテや申し送り等で情報を共有しながら複数のセラピストで同一のクライアントを支援する複数担当制のカウンセリングの構造について、セラピストがどのようなイメージや見解を抱き、工夫が必要と考えるかを明らかにすることであった。そのために、セラピストにインタビュー調査を実施した。その結果、以下のことが明らかになった。

- ・個別担当制については、セラピストは、ポジティブなイメージを抱いていた。
- ・複数担当制については、セラピストは、その構造自体にネガティブなイメージを抱いていた。
- ・限定的な状況であれば、セラピストは、複数担当制はクライアントの利益になると考えていた。

セラピストは、「セラピストとクライアントの二者関係を重視する」バイアスを抱いており、それゆえ、複数担当制について、ネガティブなイメージを抱いたことが推察される。

1. 問題意識と目的

岡野 (1991) は、カウンセリングにおける治療者と患者の関係において、治療者の自己開示が注意深く、選択的、かつ状況に応じて用いた場合に治療技法となり、その効果として、より良好な治療同盟を形成できる・患者の気づきを促進する解釈技法となる等指摘し、担当した治療者と患者間の関係性における治療同盟の重要性・有用性を述べている。

また、金沢・上野・横澤・中山 (2020) では、セラピスト(以下 Th) - クライアント(以下 Cl) 間において、今ここで何が起きているのか・両者の関係性・Cl が体験していることをカウンセリングの中で取り上げることにより、Th の視点が Th-Cl 関係および Cl の体験へと向けられると述べている。つまり、カウンセリングの中で Th が互いの関係や Cl の体験に目を向けることで、Th-Cl 間の二者関係の結びつきが強まる可能性を指摘している。

このように従来のカウンセリングでは Cl と Th との二者関係・治療同盟を重視し、その関係性の中で Th は Cl を支援してきた。それゆえ、臨床場面では個別担当制におけるカウンセリングを実施しているところが多いことが推察される。

しかし、実際の臨床場面では、例えば、有村 (2003) ではスクールカウンセラー(以下 SC) と心の教室相談員という 2 人の Th が同じ学校に配置され、「児童生徒・保護者へのカウンセリング」「担任・教育相談係へのスーパーバイズ」を両者ともに行っていることを明らかにしている。それゆえ、実際の臨床現場では複数の Th が同じ場所で活動していることも少なくないことが伺える。有村 (2003) では明らかにはされていないものの複数の Th が同じ対象に対して同じ役割を担っている可能性もあるといえる。

さらには、近年、SC 2 人分の予算措置がとられた結果、2 人の SC が違う曜日に同じ学校に勤務している現状もある(もちろん、同じ SC が週 2 回同じ学校に勤務することもある)。それゆえ、実際の臨床現場では 2 人の Th が同じ場所で活動していることも少なくないといえる。SC が 2 人配属されている学校では、上で述べたように、複数の Th が同じ対象に対して同じ

役割を担っている可能性も推察される。

従来の Cl と Th との二者関係・治療同盟を重視するカウンセリングの効果についての検証は、玉瀬・乾 (2001) や金沢他 (2020) 等で行われている。しかし、有村 (2003) のように 2 人の Th が同じ場所で活動している現状があるにも関わらず、その体制やカウンセリングの効果についての検証はなされていないのが現状である。その理由として、従来の Cl と Th との二者関係・治療同盟を重視するカウンセリング教育を大学・大学院等で受け、それを Th が支持している影響が少なからずあると考えられる。

そこで、本研究では、個別担当制とカルテや申し送り等で情報を共有しながら複数の Th で同一の Cl を支援する複数担当制のカウンセリングの構造について、Th がどのようなイメージや見解を抱き、工夫が必要と考えるかを明らかにする。

本研究の「学術的問い」は、個別担当制および複数の Th が同一の Cl を支援するカウンセリングの構造について Th はどのような見解を抱くのか、である。

この「学術的問い」を明らかにすることで、Th 側に求められる柔軟な姿勢・対応等を検討できる。ひいては、実現可能な複数の Th で同じ Cl を支援するカウンセリングの在り方を提示することで、Cl は自身のニーズに見合ったカウンセリングの在り方(個別担当制・複数担当制)を選択できることにつながると考える。

本研究を通して、病院・学校・福祉等の様々な臨床場面における複数の Th で同じ Cl を支援するカウンセリングの構築の一助にできればと考える。

2. 方法

(1) 対象および手続き

対象は臨床歴 20 年弱の 40 代女性 Th 2 名(保有資格は公認心理師・臨床心理士・精神保健福祉士、経験領域は教育・保健・医療)であった。具体的な臨床経験は、教育相談員・SC・乳幼児健診心理職・病院心理職であった。非常勤や嘱託職員として、掛け持ちしながら、複数の心理臨床を経験していた。

なお、対象者は今まで個別担当制のみ経験しており、複数担当制を経験したことはなかった。

調査は2021年8月中旬に半構造化インタビュー調査を実施した。

質問項目は

- ・自身のこれまでのカウンセリングの構造とそれに対する見解・必要な工夫等は何か等
- ・カルテや申し送り等で情報を共有しながら複数のThで同じCIを支援する構造に対する見解・必要な工夫等は何か等

であった。なお、本研究は人を対象とした研究であるため、研究者が所属する機関の研究倫理委員会における審査を経て、承認を得た(承認番号:研倫審2021-06)。

(2) 分析の方法

収集した質的データは、川喜田(1970)のKJ法を用いて分析した。なお、分析は、心理学を専門とする第一著者・第二著者で行った。具体的な手続きは以下の通りである。①インタビューの内容を抽出し、それらを1行程度に要約し、内容ごとに1枚のラベル(カード)を作成した。②作られたラベルを、意味の似通ったもの同士グループ化し、そのグループに表札となる名前をつけた(カテゴリー化)。③カテゴリー間で、類似性があると考えられるものはカテゴリー化を繰り返した(中カテゴリー、及びそれらをまとめる大カテゴリーの生成)。なお、各カテゴリー、具体例を文章化する際に、大カテゴリーは『 』、中カテゴリーは【 】で示し、それらを構成する各カテゴリーは< >で示した。さらに各カテゴリーの具体例は「 」で示した。

3. 結果及び考察

(1) 結果

KJ法で分析した結果をTable1に示した。

(2) 考察

今までのカウンセリングの構造とそれに対する見解

として、以下の3点が見いだされた。

- ①個別担当制や役割分担等の枠組みが安定していたり、仕事内容が予診・検査・カウンセリング等明確化されていたりして、構造が比較的安定しているカウンセリング(教育相談・病院臨床)は、Th自身<カウンセリングを行っている感覚>があり、ポジティブなイメージをThは抱いていることが伺えた。
- ②現場のニーズに応じて急な検査オーダーやクレーム対応等臨機応変に対応することが求められ、かつ役割分担等も不明確であり、それゆえに枠組みが安定しないカウンセリング(SC・乳幼児健診)では、何でも対応せざるを得ない状況であるゆえに、Th自身、<カウンセリングを行っている感覚のなさ>を時に抱き、Th自身の苦慮や折り合いをつけようとしていることが伺えた。
- ③カウンセリングを実施している場の構造によりTh自身の<カウンセリングを行っている感覚>と<カウンセリングを行っている感覚のなさ>があり、そこにTh自身が安心感とそれに相反する不安や戸惑いを抱いていることが伺えた。

複数のThで同じCIを支援する構造に対する見解として、以下の6点が見いだされた。

- ①複数のThで同じCIを支援する構造に対する見解として、『そもそもCIの利益になる構造かどうか疑問』と構造自体にネガティブなイメージを抱いていた。例えば、発達障害があるCIや精神疾患を発症しているCI等を想像すると、【複数のThが関わることでCIのメンタルに負荷がかかるケース】をThは懸念していることが伺えた。複数のThが関わるという構造自体がCIに混乱を抱かせ、結果的にCIの不利益につながるのではないかという懸念であることが読み取れた。
- ②構造自体へのネガティブなイメージを抱きつつも、【Thは複数で見られる安心感はある】というTh側の利益はあると考えていることが伺えた。これは、Th側が自分の見立て等を他のThと共有できることで、支援の方向性などが間違っていない等確認できることが、Thの安心感につながっていると考えられる。CIの利益としては、「違うThでもいいから今

Table 1 KJ法による分析結果

今までのカウンセリングの構造とそれに対する見解	複数の Th で同じ C1 を支援する構造に対する見解
<p>『枠組みのある教育相談』</p> <p>【親子其々の担当 Th を立てる体制】</p> <p>【役割分担体制】</p> <p><親担当></p> <p><子担当></p> <p><カウンセリングを行っている感覚></p> <p>『枠組みのないスクールカウンセラー (SC)』</p> <p>【親も子どもも同時に担当する SC 体制】</p> <p><親のみ></p> <p><子のみ></p> <p><親子同時></p> <p>【何でもこなさざるを得ない SC 体制】</p> <p><行動観察></p> <p><教員のコンサルテーション></p> <p><クレーム対応></p> <p>『枠組みのない乳幼児健診』</p> <p>【役割分担があるようでない体制】</p> <p><保健師同席の場合></p> <p><保健師同席ない場合></p> <p><発達検査のオーダー></p> <p>「遠城寺式」「K 式」</p> <p><カウンセリングを行っている感覚のなさ></p> <p>『少し枠組みのある病院』</p> <p>【Dr. と Th のある程度の役割分担体制】</p> <p><予診></p> <p><検査></p> <p><カウンセリング></p> <p><SOAP での記録></p>	<p>『他の Th と共有することの意識』</p> <p>【C1 が混乱しないために共有する意識】</p> <p>【SOAP 等で記録の仕方の統一】</p> <p><C1 の印象など重要なことは記録に記載></p> <p>【質問・情報共有の時間の確保】</p> <p><記録に加え Th 同士が会って話すことを C1 に伝えた方が C1 も安心する></p> <p>「教育相談で親担当・子ども担当で話し合う必要がある」</p> <p>【見立ての共通理解】</p> <p><セッションの理解だけでなく C1 の持つ問題の理解></p> <p><見立てから方針が決まる></p> <p>『コーディネートしてくれる人物の人となりの重要性』</p> <p>【Th と C1 をつなげてくれる Dr. や担任の人柄は重要】</p> <p>【チーム医療・チーム学校としての機能】</p> <p>『手間暇がかかるイメージ』</p> <p>【自分のための記録から他の Th のための記録】</p> <p>『そもそも C1 の利益になる構造かどうか疑問』</p> <p>【複数の Th が関わることで C1 に負荷がかかるケース】</p> <p>【Th は複数で見られる安心感はある】</p> <p>【Th から見て緊急性が高くないケースなら C1 の利益につながる可能性】</p> <p>【C1 のニーズの度合い】</p> <p><特定の Th に固執しないニーズ></p> <p>「違う Th でもいいから今日お話ししたい等」</p> <p>「子どもの癩癩の対応の一般的なことを聞きたい等」</p> <p><Th 側は一般的対応の助言なら対応可能></p> <p>「次回いつも会っている〇〇Th の約束までのつなぎ役でいいなら対応できる」</p> <p>「Th と話せてよかったという感覚が欲しい時は対応できる」</p> <p>『C1 の健康度の高さ低さによる線引き』</p> <p>【C1 の健康度が高いと複数 Th で同じ C1 を支援できる】</p> <p>【C1 の健康度が低いと複数 Th で同じ C1 を支援しない方がよい】</p> <p>「子どもを愛せないという保護者の相談は担当した Th 一人で対応したほうがよい」</p> <p>『救急外来のようなつなぎの役割』</p> <p>【主たる Th との次回約束がかなり先の場合】</p>

日お話ししたい等」の急いでいる場合や「子どもの病癢の対応の一般的なことを聞きたい等」専門職による一般的知識の教授を希望している場合といった〈特定のThに固執しないニーズ〉には、〈Th側は一般的対応の助言なら対応可能〉と考え、【CIのニーズの度合い】および『CIの健康度の高さ低さによる練引き』を行い、限定的ではあるものの〈CIの健康度が高いと複数Thで同じCIを支援できる〉という見解をThは持っていることが伺えた。しかし、CIの個別性に合わせたカウンセリングやThとCIの結びつきが強い場合やCIの健康度が低い場合は、複数のThで支援しない方が望ましいと考えていることが読み取れた。

- ③積極的に複数のThで同じCIを支援することにTh自身はポジティブな姿勢ではなく、【主たるThとの次回約束がかなり先の場合】等『救急外来のようなつなぎの役割』として、複数のThで同じCIを支援する構造なら対応可能という見解を持っていることが伺えた。つまり、主たるThとの次回カウンセリング日までの間隔があまりにも空いていることは、CIにとって不利益につながると考え、それゆえ、つなぎの役割として違うThがCIを支援することはCIの利益につながると考えていることが読み取れた。医療においても、地域にかかりつけ医がいても、土日祝日にいつものクリニックが休みの場合、休日の救急外来を受診し、診察や投薬を求めることはある。そのようなイメージをThは抱き、緊急の場合でカウンセリングや専門職の見立て等が必要な場合は、いつもと異なるThが対応することはCIの利益につながると考えているといえる。
- ④複数のThで同じCIを支援する構造に対する見解としては、自身のみで担当するケースに比し、『他のThと共有することの意識』はより高まり、自分のための記録から他者に伝え、他者と共有するための記録にする必要性が生じる。それゆえ、複数のThで同じCIを支援する構造には『手間暇がかかるイメージ』と自分一人だけで支援するカウンセリングよりも時間や手間が増えるため、そのことにややネガティブなイメージを抱いていることが伺えた。
- ⑤『他のThと共有することの意識』、『手間暇がかか

るイメージ』の具体的内容としては【見立ての共通理解】を含めTh間における【質問・情報共有の時間の確保】やオリジナルの記録から【SOAP等で記録の仕方の統一】を行い、自分一人だけで支援するカウンセリングよりも【CIが混乱しないために共有する意識】を持つことを重視していることが伺えた。SOAP記録とは、古市(2017)で、CIの「問題を明確に捉え、その問題解決法のプロセスに沿って記録すること」とされている。SにはCIの主観的情報(Subject)、Oには、知能検査の結果等の客観的情報(Object)、Aには主観的情報と客観的情報を踏まえて、考えられる問題についてのアセスメント(Assessment)、Pには、アセスメントの内容を踏まえた支援計画等の立案(Plan)を記載する。つまり、記録方法を統一することで、より共有しやすくなることを重視していることが伺えた。記録方法の統一に加え、Thは非常勤での働き方が多いため、例えば勤務曜日が異なる場合は、Thらで日程調整を行い、「教育相談で親担当・子ども担当で話し合う必要がある」ように、Thらが対面して話し合うことで、【見立ての共通理解】を行ったり、質問・情報共有をしたりすることが必要と考えていることが読み取れた。

- ⑥Thは非常勤での働き方が多いため、複数のThで同じCIを支援するには、より一層【チーム医療・チーム学校としての機能】する必要性を感じていることが伺えた。例えば、担任が自分のクラスの子どもやその保護者の様子や困り感を見とり、校内の一人のSCにつなげるのが従来の流れといえる。しかし、複数のThが校内にいと、担任は複数のSCの人柄や様子をイメージし、複数のThによる支援体制について子どもや保護者がどう思うか、この子ども、保護者に合う形なのか等も見とる必要性が生じるだろう。医療においても同様で、主治医が自分の患者の状態像やニーズをアセスメントし、院内の一人のThに心理的支援のオーダーをかける従来の流れから、院内の複数のThの人柄や様子をイメージし、複数のThによる支援体制をこの患者がどう思うか、この患者に合う形なのか等もアセスメントする必要性が生じるといえる。それゆえ、よ

り一層【チーム医療・チーム学校としての機能】することが求められると考えたことが読み取れた。それらを実現するには、よりCIのニーズや気持ちや状態等を考える必要性があるため【ThとCIをつなげてくれるDr.や担任の人柄は重要】とThが考えていることが伺えた。

(3) まとめ

本研究では、個別担当制とカルテや申し送り等で情報を共有しながら複数のThで同一CIを支援する複数担当制のカウンセリングの構造について、Thがどのようなイメージや見解を抱き、工夫が必要と考えるかを明らかにすることを目的に調査を行った。

その結果、教育相談・病院臨床等の個別担当制については、Thは<カウンセリングを行っている感覚>があり、ポジティブなイメージを抱いていた。しかし、そこには個別担当制という視点以外に枠組みが安定しているか否かという視点も影響していることが伺えた。枠組みが安定していないSC・乳幼児健診については<カウンセリングを行っている感覚のなさ>を抱いていた。

一方、複数担当制については、『そもそもCIの利益になる構造かどうか疑問』と構造自体にネガティブなイメージを抱いていた。しかし、【Thは複数で見られる安心感はある】とTh側の利益はあると考えていることが伺えた。また、限定的ではあるものの【主たるThとの次回約束がかなり先の場合】等『救急外来のようなつなぎの役割』として複数担当制は対応可能と考えていることが読み取れた。ただ、複数で担当するゆえ、『他のThと共有することの意識』はより高まるため『手間暇がかかるイメージ』とややネガティブなイメージを抱いていた。

具体的には、【見立ての共通理解】、【質問・情報共有の時間の確保】、【SOAP等で記録の仕方の統一】する工夫を重視していることが伺えた。

つまり、複数担当制については、より一層【チーム医療・チーム学校としての機能】する必要性を感じていると考えられた。

個別担当制については、ポジティブなイメージ、複数担当制についてはネガティブなイメージをThが

抱いていることが読み取れた。ただ、個別担当制については、枠組みが安定しているか否かという視点も影響していることが推察された。

複数担当制については、複数のThが関わるという構造自体がCIに混乱を抱かせる可能性があり、その意味では枠組みが安定しないカウンセリングに近いイメージがあったことが推察される。それゆえ、ネガティブなイメージをThは抱いていた。しかし、限定的な状況であれば、CIの利益になると考えていた。Th側には【Thは複数で見られる安心感はある】とポジティブなイメージを抱きつつも、そのためには、『手間暇がかかるイメージ』とネガティブなイメージを抱いていた。

ここには、Th自身が勤務日に多くのケースを抱えている現状が伺え、それゆえ、情報共有する時間を確保することに『手間暇がかかるイメージ』を抱き、自分の負担がより増えることをイメージしたことが推察される。

また、Th自身が勤務日に多くのケースを抱えている現状からカウンセリングの間隔があまりにも空いていることは、CIにとって不利益につながると考え、CIの状態像等の確認のためには、複数担当制はCIの利益になると考えている。つまり、Thの勤務日に多くの予約が入っているため、望ましい時期に予約をいれることができず、その結果、次のカウンセリングまでの間隔があまりにも空く現状があるといえる。

今回の調査では、大きなイメージとして個別担当制についてはポジティブ、複数担当制についてはネガティブなものを抱えていることが示唆された。その背景として次のことが考えられる。

Thとしては、自身が受けた教育や臨床経験から、ThとCIの二者関係を重視する個別担当制カウンセリングが基本と考えていることが伺え、それに反する構造になる複数担当制には受け入れがたいものがあり、限定的な形であれば対応可能という考えであることが伺えた。

しかし、ここには、認知バイアスの影響が伺える。森北(2021)は、技術者の意思決定にバイアスが影響するかどうかの検証を試みる調査を行い、「論理性と専門知識を有するはずの技術者といえども認知心理

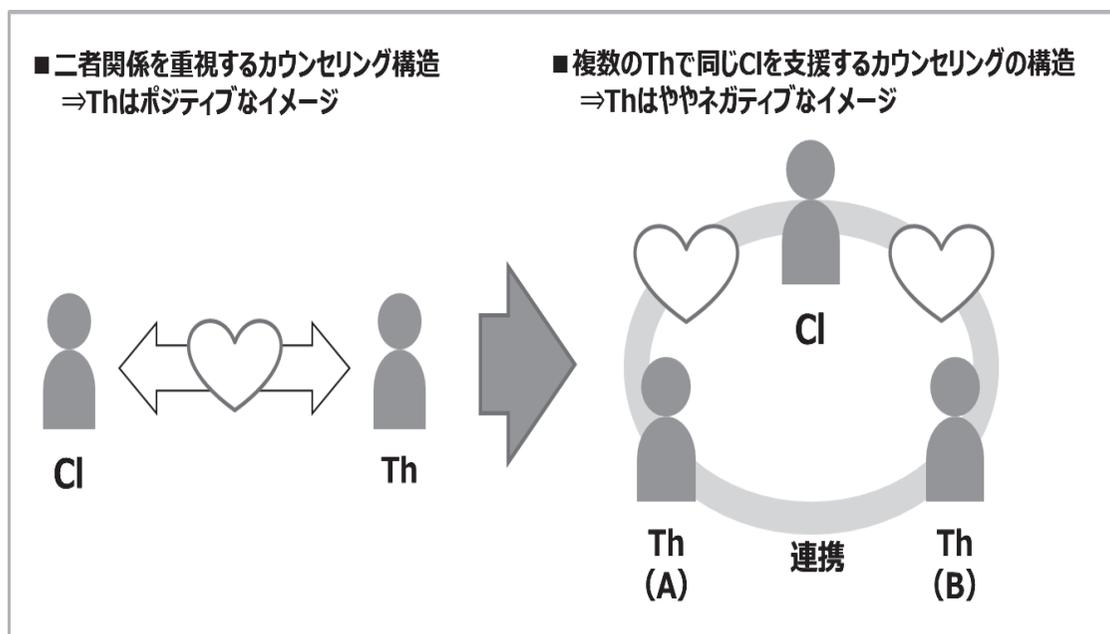


Fig.1 Thの見解のイメージ

学の研究で指摘されている多くのバイアスが技術判断に影響を与えていることが示唆された」と指摘している。

具体的には「有望な新技術がこれまで技術者自身が長年関与し続けてきたものと異なる技術だった場合、技術者は無意識のうちに自分の技術を優先する判断を下そうとする」可能性を指摘している。

このことから本研究においても、Th自身、ThとCIの二者関係を重視する個別担当制のカウンセリングに長年関与しており、それゆえ、それと異なる複数担当制の構造に対して、ネガティブなイメージを抱き、ThとCIの二者関係を重視する個別担当制のカウンセリングが望ましいとする判断を下そうとした流れがあることが推察される。

Thの見解のイメージ図をFig. 1に示す。

4. 今後の課題

本研究では、2名の研究協力者への調査に留まっている。それゆえ、本研究から得られた結果や考察

は、研究として一般化できるものとはいえない。

本研究の結果・考察はあくまで一つの視点を提示したことにすぎないため、今後は対象者の数を増やして調査を重ねていく必要がある。

本研究では、臨床歴が20年弱あるThの意見を抽出したが、過去に受けた教育や臨床歴の長さから、二者関係を重視する個別担当制のカウンセリングを望ましいとする長年のバイアスは否めないといえる。

それゆえ、今後は、臨床歴10年程度、5年以内等で対象者を検討したり、今回の対象者とは異なる領域（電話相談・オンラインカウンセリング・産業・司法・福祉等）のThの意見を抽出したりする必要がある。

また、今回の調査で、個別担当制であっても、SCや乳幼児健診のように枠組みが安定しないものにはThはネガティブなイメージを抱いていた。このことから、複数担当制の枠組みをより具体的で安定したものを提示することで、Thが抱くイメージが変化する可能性や実際の臨床場面における応用可能性が見いだされることもあろう。今後の調査でその点を留意する必要があるといえるだろう。

付記

本研究は、日本子育て学会第13回大会の研究報告内容を加筆修正したものである。

引用文献

- 有村信子(2003). 養護教諭複数配置やスクールカウンセラー導入が養護教諭の執務に与える影響(Ⅱ): スクールカウンセラー等との連携の観点から 鹿児島純心女子短期大学紀要,33,19-29.
- 古市孝義(2017). A 施設における介護記録の勉強会実施前後の意識の変化 人間生活文化研究,27, 574-591.
- 金沢吉展・上野まどか・横澤直文・中山愛実(2020). 臨床心理面接におけるカウンセラー・クライアント関係に関する研究—カウンセラー・クライアント両者の体験の質的分析— 明治学院大学心理学紀要,30,13-26.
- 川喜田二郎(1970). 続・発想法 KJ法の展開と応用 中央公論新社.
- 森良弘・北 寿郎(2021). 新技術に対する技術者の認知バイアスに関する研究 BMAジャーナル 21(1), 15-29.
- 岡野 憲一郎(1991). 治療者の自己開示 精神分析研究,35, 169-181.
- 玉瀬 耕治・乾 信一郎(2001). カウンセラーの態度、技法及び面接効果の評定に関する研究 奈良教育大学教育研究所紀要,37, 43 - 53.